

二葉亭四遠全集

第六卷

二葉亭四迷全集

第六卷

昭和四十年二月二十六日 第一刷発行 © 日記・手帳一

定価四〇〇円

著者 二葉亭四迷

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二丁目三番地 岩波雄二郎

印刷者 東京都板橋区板橋四丁目四七番七号 白井知一

発行所

東京都千代田区
神田一ツ橋三

株式会社

岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

目次

くち葉集	ひとかごめ		七
落葉のはきよせ	二籠め		四九
落葉のはきよせ	三籠め		一〇九
遊外紀行			一六五
日記・手帳	一		
明治三十四、五年			二〇七
明治三十五年（手帳一）			二一
同	（手帳二）		二二三

同	(手帳三)	二四
同	(手帳四)	二八
明治三十六年(光緒廿九年二月中紀事)		三五
同		二八三
明治三十六、七、九年(手帳五)		二八六
明治三十七年		三〇一
對外時事拔萃(手帳六)		三〇三
明治三十七、八年(手帳七)		三一
明治三十七年(手帳八)		三八
露國政情詳細(手帳九)		三三
明治三十八年(手帳十)		三六〇
明治三十七、八年(手帳十一)		三六八
明治三十七年(手帳十二)		三七七
明治三十七、八年(手帳十三)		三八六

明治三十七、八年（手帳十四）	三六九
明治三十八、九年（手帳十五）	四〇一
解説	四三

くち葉集・落葉のはきよせ

凡 例

一 「くち葉集 ひとかごめ」及び「落葉のはきよせ 二籠め」は著者が附した題名であるが、「三籠め」に当るものには題名が附してない。しかしながら内容と時期から考えて、当然「二籠め」に続くものと思われるので、本書では「落葉のはきよせ 三籠め」とした。

二 校訂に当っては原文を尊重し、左に示すほかはみだりに修正を加えなかった。

〔 〕は脱字とおもわれる文字を補った。

（ ）の中の小活字は誤記とおもわれる文字の正しい文字を示す。

〔 〕は抹消されてあるもので、必要とおもわれる字句を示す。原則として小活字を用いたが、形式をととのえるために同号活字を用いた場合もある。

（ ）は行間もしくは欄外に書かれてある字句である。欄外の場合は特に欄外とことわった。

また読み易いように、原則として句点のあるべきところを、一字アキとした。

くち葉集 ひとかごめ

物書くことおほえてより二十年 筆ならしのた
めにとて屢々白紙を綴り合せたること有りたれど
いつもながらの三日坊主末まで書きとほしたるこ
とは一度もなかりし それに懲りて此度は紙賣り
の翁を尋ねて此の帳面といふものをととのへ侍り
けり、さるはこれに付けたるいかめしき表紙にも
恥ぢて鼻紙にはさき棄てじとて也 かくまてに工
みたれど尙ほ我ながら心もとなし、さてもうとま
しの我心やと書かぬ先からまづ愛想を盡かしてあ
きッばいの杏雨冷々亭の南窓の下にしるす 于時
明治二十一年八月七日也

日本文章の將來

報知社の思軒居士、先頃西京に遊ひて、同志社諸氏

の需に應じて、その禮拜堂にて「日本文章の將來」と
題する演説をせられたり、その全文は載せて、二十一
年七月二十四日の報知新聞に在り、

今其の論旨の歸着する所を考ふるに、居士はまづ(1)
日本現時の文章は亂雜極まりなければいづかは一に歸
着せざる可からすと論じ、(2)次に日本語の中には支
那語より淵原し來れるもの多ければ支那字を用ひざれ
ば不便なり 羅馬字假名字などはかりにては到底間に
合ひかぬる也と論じ、(3)次に既に支那字日本文章に
不可缺的要素なれば如何に之を使用すへきやと問ひを
起して まづ日本現時の文章と支那文章との優劣を研
究して日本文章は我儘至極なれどその自在なることは
支那文に優ること遠しと稍々論定し、(4)次に「文章
は唯人の考ひを表するものなり」と説き起して腦髓の
有様に隨ひ文章は緻密にも簡單にもなる、日本文章の
日々ます／＼支那文章に遠かりゆくも故有ることなり
と論し、(5)次に今日までは今日までの文章にて間に
合ひたるへけれと是れよりは所謂西洋思想ます／＼輸

入せらる可ければ文體も隨ツて西洋風となるが事物の順序也 故に日本將來の文體は「能く人に通ずる直譯の文體」たらざるへからすと論し、(6)次に「談話と文章とは劃然二物にして決して之を一にす可らず 談話と文章と殆と同じといへる西洋の文章にても尙ほ全く談話と一なること能はず 唯、その双方の距離の極めて近しいふまてにて談話即ち文章を成すとは云ふ可らざるは平生西洋の文章に習ひたる諸君の熟知する所也 去れば談話と文章を必ず一にせんと云ふは到底中正の議にあらず 唯た要は談話と文章の距離をして成るべきだけ近からしむるに在るべきのみ」とて將來の文體には支那字を用ひなからも極めて平易なる字面のみ用ふるに至りて初め(7)「落着くへし」と論じられたり、是れまでか演說の主旨にて餘論には(8)「平生心かけて字性を吟味しおくへし」と論せられたれと論旨に大なる關係なければ委くはしるさず

一題總て六段二千萬言 懇々信切に論しられたり、嗚呼思軒居「士」も亦日本文章に忠實なる人なるかな、

予謫劣自ら揣らず、夙に日本文章の成り行きに懸念して茲に年有り 平生考へ置きたることなきにしもあらず、然とも予の意見は居士のに異なりたる節少からず、試に打出さんか、此論の

(第一)は同意なり

(第二)は少しく言ふ可きこと有り、居士は支那語に淵源せる日本語なれば同音異義なる文字多く有り之を羅馬字又は假名文字にて書きたれば別ちかたくなるへしといふに似たり、成程今の分にてはさる不便もあるへし、然れども將來普通言語といふもの定まりたる日に於ては如何、智慧といふ言葉は素と佛語なれどその後轉化して日用の言語となれり、されば假名に「チエ」とかきたればとて歌ならては「千枝」とは讀まばとて漢字にて書きたればとてその働きは一ツなりその働きの一ツなれば漢字にて書かんより假名文字または羅馬字など簡易なる方法によりて書きてこそよかめ、今の世にて新に出來したる言葉もまた此の智慧

といふ言葉のことく後の世には常の言葉にならずしもあらず、今直ちに漢字を廢して羅馬字さては假名文字にてかくべしといふは或は偏言ひとことなめれど、ゆく／＼はしかするぞよしといふに於て何の不可あるべき、かきへば人或はいはん、同音異義なる言葉をかなにかきては不便ならずやと、されとそれは西洋にも有ることとなり、假令へば英語にて *hair* といへば空氣にもなり、歌の調子の事にもなり、人の態度様子のことにもなる也、かく一字にて三義を有すれど、その用ひ方用ひ所によりて如何に解すへきやは知らるへき也、日本論〔語〕を羅馬字にて綴れば同し事出て來るべし 即ち *kami* といへば神ともなり、紙ともなり、上ともなり、髪ともなり、または働詞の元字となりて「加味」「佳味」などともなるべし、かく一字にて數義を有する字出て來ればとて英語の如くその用ひ方用ひ所によりて如何なる意味にて用ひたるやは考へ知らるべし、尤も漢字にて認むれば意義一目にして明瞭なるべけれどその代り、神、紙、上、髪、加味、佳味など一字々々

に覺えこまねばならぬ煩ひあるべければ畢竟時間潰しにて羅馬字または假名字にて認むる方簡便にして窻かに優れりと謂はざる可らず、かくても尙ほ只同音異義なる言葉有りとて日本文章には支那字を用ひざる可らずや

(第三) 支那字は日本文章に缺く可らずとは思はれねど、支那言語は必要なるべし、されば此の第三の論點にはさしたる異議を容るへき節なけれど支那文章と日本文章との優劣の論じ方に至りて少しく如何と思はる、居〔士〕は日本語の自在なる事を説きて左の六例を示されたり、

- 第一 余は諸君を見たり
 - 第二 余は見たり諸君を
 - 第三 諸君を見たり余は
 - 第四 諸君を余は見たり
 - 第五 見たり諸君を余は
 - 第六 見たり余は諸君を
- 此六様の中いづれを用ひてもその意義を通すること

を得べしと明言をさへ附け加へられたり、然れとも余は以爲らく意義は通じ得へしといへど（始の一句を除くの外は）之を以て日本文法に適ひたりとはなしかたし、若し文法に適はせんとせば左の如くなるべし

第一 余は諸君を見たり 是れは正格なり

第二 余は見たり、何人を、諸君を、ともいふへけれど是れは極めて變格なり

第三 全く格にあはず「諸君を見たるは余なり」といでは適はず

第四 適はず「諸君を余が見たるなり」など有るべし

第五 全く適はず

第六 同上

思軒居士は如何なる文法に據りてかくは句造りせられたるにや、奇怪の事なり、もしかくいふとも察し得べしとなればその通りなれど、かくては此議論に縁なきことになりて折角の六例も無益の骨折りとなりなにかし、尤も平生の談話にはかく不規則なることもいふ

めれど、そは章なき會話の事にて文章の上の沙汰とも覺えず、兎にも角にも不可思議なる事なりかし、

（第四）は異議なし

（第五）説き方漠然として如何にとも解しかたし、若くは居士の持論なる例の支那にて佛書を翻譯したる時一種異様の造句法を用ひたるやうに日本にてもしかく西洋文體を輸入し來るへしといへることか さあらば大體まづ同意なれとも一二注意しておくべき事有り、第一言語の調子（Euphony）に注意すべき事、第二言語は自然に發達せしむべき事、第三日本固有の美は甞之を保存せしむべきのみならず之を西洋文固有の美と抱合せしむべき事なり、之を要するに此章は全篇の主意の存する所なるに居士の之を説く模糊たりしは遺憾窮まりなし、此事に就て已れ私見あり 後に詳論すべし、

（第六）居士の談話と文章とは劃然二物にして混同す可らずと論しられたるは確論なり 然れともかくいひたればとて言文一途論の駁説にはならず 是もまた

後に詳論すべし

(第七) 羅馬字または假名文字にて日本言論を寫すの説可否定まらされば此の余論の是非も定めかたし故にこれはぬかして論のうちには入れず

さて是れまでは思軒居士の「日本將來の文章」に就て一々其の不審の角を擧けたるまで也 下に掲けたるは予の議論なり、然れとも固より定論にはあらず、之れに安んじて研究を怠るへからざるは勿論なり

日本文章の將來に關する私見

凡そ言語は簡にして意明かなるを尙ぶ、その心を傳ふるに於て尤も便なるに取るなり、人の意思を傳ふる道は數多有り、顔色に依りても傳ふべし、身振りに頼りても傳ふべし、獨り言語文章のみに依るにあらず、然れとも言語はその傳心に尤も便利にして且つ必要なものなりと謂はざる可らず

故に言語は人の意思の反映にしてまづ無聲の言語有りて然る後有聲の言語有るを得へく、まづ無形の文字

有りて然る後有形の文字有るを得べし、然らば則ち言語と文章とは意思の聲に形はれ形に形はれたるものといふも固より不可なかる可き歟、

若し果して言語は意思の反映なりせば、則ち凡そ言語の轉變移改する所以は一に意思の有様に淵源せざる可らず、意思鄙陋なるに獨り言語のみを高尙にせんとするも決して能くす可きにあらず 而して意思さへ高尙なれば言語は自ら之れに伴ふて高尙なるに至るべきなり、故に野蠻人の言語は卑下にして文明人の言語は高尚優美なり、是れ然るを期せず自ら然るもの、固と一時の私意によりて左右し得べきものにあらず、蓋し自然の法なればなり、

言語既に然らば文章もまた然らざるを得ず、何となれば、凡そ心に思ふ所を筆に現はしたる者は即ち *Written language* 文章たらざる可らさればなり、

勿論文章は談話にあらず談話は文章にあらず、然れとも談話を紙に寫せば是れ文章にして、文章を聲に現はせば即ち是れ談話なり、同一の意思が否同一の言語

point が或は口にて言はれ或は筆にて書せられたればとて豈にその性質を異にすべき理有らんや、若し之れ有りといはゞ是れ四角なる器に盛りたる水は三角なる器に盛たる水と其の性質を異にすといふもの也 甚た謂はれなき議論なり

世に一種の論者有り 曰く歐米諸國に於ては言文殆と一致なれとも全く同一なるにはあらず、唯、その懸隔極めて少なきのみ」ト 余は此言を聞いて少く疑ひなき能はず、抑、此説は歐米諸國の言文を如何に比較して立てたるものなりや、歐米諸國には二ツの文法なし、言語も文章も皆同一の文法を奉ずるもの也、勿論平生の談話は唯便を一時に取るか故に整齊を缺くか常なり、必ず缺かざる可らざるにあらず、自らに缺くやうに成るなり、故に一旦公會場に到て衆人に向ひて談話する時、即ち演説する時はその言ふ所整齊不齊毫も文章に錯はず、若し人之を信せされば請ふ歐米諸國人の演説筆記を讀め、即ち庶幾くは思ひ半に過きん

謂ふに彼れ論者は歐米諸國語の平生の談話には整齊

を缺き文章を綴る時には極めて整齊なるを見て早まりて言文一致ならずと論定したるものならん、美なる婦人は醜なる婦人とその形ちこそ異なれ、その婦人たる性質に於て異なる可き謂はれなし、彼れ論者は美なる婦人は婦人なれと醜なる婦人は婦人ならずとする乎、

故に余は彼の一種の論者が如何に主張するも余は斷然歐米諸國に於ては言文は一途なりといはんとす、それは兎まれ角まれ言文の一致なる可きは前に論せし所に由りても知らるべし、不知余輩及び余輩の子孫等は何か爲に言文を二途して差別せざるへからざるか 否、言文は一途にせざらんと欲するも得へからざるもの也 凡そ人間の利に趨くや猶ほ水の卑きに就くか如く沛然として禦く可らざるもの也、一二執着深き弊もらされの老耄漢學者が不同意を稱へたればとて我輩日本人はそれに氣をかね、遠慮をして我認めて利となす所を遂行するに怯なるものにあらず、況んや彼等老朽學者と雖も未だ言文一途の利を認めざる者にあらざるをや、思軒居士のその長たらしき意味の少き演説に於て言文

の距離は成る可く近つかすへしといひたるは即ちその明證なり

故に余輩は世の老耄學者が己れかの生れ落ちより視慣れ聞きなれたる文章に名残を惜しみてクドク愚癡めきたることをいふをも顧みず日本將來の文章は言文一途たらざる可らずと斷言せんと欲す

余は解り切りたることをいつまでも繰り返すを欲せず 故に一トまづ是にて筆を擱く、尙ほ自今余の議論に對して反對かましき事を公言する者あるに於ては、見當り次第屹度筆誅に行ふ可き者也

清梁玉繩不暇癩記反譯

いきとしいけるもの誰かはあそひたのしむことをめてゝたちはたらくことをいとはさりける、しかはあれど世の人うちこぞりてかれは物の役にえたゝうまじきしれものぞといひはやさむにはいとう打はらたちてにくかりなんものぞ、そをあらためて、これはよろづに物うかるへき」といはゝうちよろこびておのれもさな

りとおもふめり、まことはものうかるといふも物の役にえたゝふまじといふも　ひとつなるをや、杜工部のからうたに興來不暇癩といふ句有りけり、おのれそれにおもひよせてゐ間の名を不暇癩齋とぞ名づけ侍る、そのこゝろをたつぬる人有りければこたへて世の人のものうからぬはものうからぬほとんどのさえあるなめり、またものうかるもそれにつけてもさち是有るめり、おのれそれほとんどのさえなければものうかるましとおもふともさはしにくし、またそのさちなければなにをたのみてぞものうかるへき、はた今もむかしもそこにゆきつきたる人はまれなり、おのれ物うかりと口にはいへとまことは物うからむとて心の休むときなきなりと聞え侍る　その人うちわらひて李仲鎮癩窠をしつらへつるときなん韓南澗からうたよみてつかはしける　むつかしければ此の國のことはにうつしつ　へあなかちにもものうからむとたくみてぞ　ものうかるこゝろ我はしりつる、そこもまたかくぞあるへしといふ、かりにこのことをかきつけて記とはするなりけり

竹取物語反譯

昔有竹取翁云者、日涉山野伐竹以爲業焉、翁名曰讚岐造麻呂、一日林間見一竿脩竹根本帶灼耀光者挺然抽地、心怪之、乃到其下檢之、竿筒中有物、光明赫奕、蓋稚兒橫臥也、稚兒身材三尺許、頗有容色、可愛、翁熟視而歎曰、此竹也所吾朝見暮視者、無乃此子爲我兒微乎、卽執而歸家、令其妻乳育焉、稚兒實有姿色矣、以其幼稚故、容小籠育之、竹取翁既得稚兒而愛之、其後出伐竹每獲隔節納黃金幾多者云、

嗚呼反譯豈易爲乎哉、予謬劣不自揣、謾擬取竹取物語反譯諸漢文、然筆頭有物、澀滯阻礙、不能如意、於是乎始知予之筆遂無能譯之、卽擲筆歎息者久之、

與友人勸學書

月日、某白、僕生平不輕許于人、然又不肯輕棄於人、有一善焉、隨而稱揚之、只恐其不成不遂、有一不善焉、隨而面折之、只恐其不除不去之晚、足下常視僕之如此、

贊揚不措、如望僕益勇于成人之美去人之惡、然則足下亦樂聞其不善者耶、非耶、古人云朋友之交在相知其心、又相規其過、若足下樂聞其過而親交如僕者 知之遂不爲足下一言之、則足下負平生宿志而僕亦永爲故人罪人、是固非有志者所忍也、今欲試陳僕平生不滿於足下、以抗論其是非與利害 不知足下能平心虛懷傾聽僕之直言乎、所僕之不滿於足下者 在足下小量自畫而不致力于真理研究也 是所僕久欲與足下言也 是所僕今將爲足下大鳴其非者也、足下實詩人也、困學苦行非其所能也固矣、足下自稱嬾人、稱棄人、又稱無意於求功名富貴而僕固深知不足下爲如此之言欲以釣聲名、而皆真摯之言出於足下肺腑中 然至於足下自知其言大悖理毀德也否也 僕不能無大疑卽質諸足下則曰是余病也、然未聞足下勉強于拯其病 又殆如不甚欲拯其病者、

水天逸事

壬戌秋九月某日夜余與客泛舟墨江、此夜水烟深鎖四顧黯淡、仰睨蒼空月影模糊星光不入眼、舟載一妓曰蕙